

だが今の様子でははるが良家の当主夫人などと思う者は一人もないだろう。

まして今は互いに普段着であり、身分を示すようなものは何も持つてはいない。帝都を遠く離れた場所では、我々を宮ノ杜と判る人間もまずはいないだろう。

(ならば…まあ、よいか)

はるはまだ若い。本来ならまだ家でのんびりと花嫁修業などしていてもおかしくはない歳なのだ。

だが家のために幼い頃から働いて、今は宮ノ杜の正妻という重責をその細い肩に担っている。遊びらしい遊びなど、することもほとんど無かったのだろう。

(…たまには羽を伸ばさせてやるのも悪くはなからう)

そんな甘い考えをしている自分に、自分自身でも少し、驚く。

だが、目の前で楽しそうにしているはるを見ると、それもどうでもよいことのように思えてくるのだ。

(妹とは…こういうものなのかもしれない)

男ばかりの宮ノ杜ではついぞ感じたことはないが、妹を持つ同期の連中の姿はよく見掛けていた。普段どんなに硬骨漢を気取っている奴でも、大抵面

会に来る妹には甘い顔を見せていた。

その時はそんな奴らを軟弱だと思っていたものだが、今になってその気持ちに少し判る。

年若い身内の女を、ただ無条件に甘やかしたいと思う、その本能的な何かが。

(そうだ…、これはきつと妹というもののへの感情なのだ)

立場的にははるは義理の姉であるが、どうしようと年下であることは変わらない。

公式の場ではもちろん義姉として立てねばなるまいが、そうでない場ならば少しぐらひは許されるのではないだろうか。

(はるは…俺の家族なのだからな)

だからきつと許される。

他人ならば許されない、この甘やかな感情も。

自分の感情にようやくすつきりと納得して、俺は顔を上げる。

考えに耽っている間にずいぶん歩いていたが、ふ